

飯田武郷とその周辺

古川清彦

要旨 飯田武郷は『日本書紀通釈』の著者として有名であるが、幕末期の国学者としての地位は必らずしも明らかではなく、地味な存在である。しかし国学の実践活動においては権田直助・落合直亮・相楽総三らと結んで多面的であり、岩倉具視との関係も興味深いものがある。そして権田・落合・相楽と異なる学者としての道を歩んで、明治維新後の時代に身を処した点に特色があるが、詩歌の道にも優れていた。最近、幕末の志士における詩歌の重要性が説かれるが、武郷はそうした面で志士としての活動とともに詩歌文章によって歴史の変革期の記録を行った文人としての面も備えている。

本稿においては、家系・学統・国学活動などを周辺の情況・人物などに触れながら考察した。そして文人としての意味からは『蓬室集』に注目したのである。

一、家系

飯田家の系譜については武郷たけごうの七男飯田季治の手記（飯田家蔵）が詳しいので引いてみる。「飯田氏は、藤原武智麿の後裔で、累代洛中に居住してゐたが、左衛門尉武基の孫・武興の時、延宝二年に始めて江戸に出で、其子・武常は儒学を以て竹田越前守に召された。而して其の次男の武総たけふさの時に至って、始めて諏訪侯に仕へたのであった。武総は元禄十五年江戸に生れ、十二三歳にして能く詩文を作り、字も亦た巧みに書いたので、親戚であった服部南郭が之れを奇として、門弟の人々にも其の噂などをしたのであった。時に信州高島城主の分家たる諏訪美濃守頼篤侯も、南郭に文辭を問はれてゐたが、武総の事を聞及ばれて、其子・頼峯（元禄十六年江戸に生る）の扈從に之を召されたので、正徳四年の秋九月、即ち部屋住の中小姓と為り、父母の膝下を離れて京都に上った。時に武総は十三歳、頼峯は十二歳であつた。然るに享保六年四月、頼峯は其の宗家たる信濃国高島の城主・諏訪忠虎侯の養嗣子と為つたので、同年五月十三日頼峯に従つて江戸に帰つた。斯くて同年十二月、頼峯は將軍に謁して従五位下に叙せられ、伊勢守を拝し、名を忠林と改められた。其後、享保十六年諏訪入部の時、武総は侯に従つて始めて諏訪に至り、尋いで勘定奉行を仰付られ、特に公儀の際は諏訪棍之葉の御紋拜用を聴された。是は実に破格の事であつたが、武総を始め累代憚つて用ゐなかつた。凡そ斯う言つた有様で、侯は頗る優遇されたので、藩中に於ける家の格式は勝れてゐたが、之に反して扶持は微禄であつた。即ち此の武総が信州高島の藩士となつた濫觴で、爾来『武堯たけふか—武成—則芳—武敏—武郷』と五代に亘り、世々諏訪侯に仕へたのであつた。」

武郷はこの飯田家に幕末の文政十年（一八二七）十二月六日、芝金杉の将監橋近くの諏訪藩邸内で生まれた。幼名は彦

介、五六才で四書を素読し記憶力が抜群といわれた。天保三年、父武敏が三十九才の若さで病没、母ても実家に戻り、五才で孤児となった彦介は叔父に引き取られた。

二、学統など

天保八年十一才の時、彦介は芝赤羽橋にあった服部元済もとなりの芙葉館ふきよに入學し漢学を学んだ。元済は南郭の曾孫で、教育方針は古学・古道に基づいていた。天保十二年元済の病死によって彦介は芙葉館を退學し、翌十四年十七才で故郷の諏訪に帰った。元服して通称を守人もりとと改め、諱名を武郷と呼んで、高島藩士となった。武郷の記した『蓬室手記』（飯田家蔵）によれば「弘化三年丙午ノ頃ヨリ皇朝ノ古書ヲ讀ミハシム和歌ヲモヨミ習ヘリ海野游翁先生門ニ入千野方義立木定保等歌ノ友タリ二十才。」とある。先に本居宣長の著書を読んで国学に志した武郷は天保十四年平田篤胤没後の門人となった。十八才で再び江戸に遊んだ武郷は、游翁海野幸典ゆまのりの門に入って和歌を学んだのである。漢学・国学・歌学の三者を修めたことが、『日本書記通釈』の業績を始め、武郷の種々の活動の源泉となったことはいまでもあるまい。なお『蓬室手記』によれば次のような記事が見られる。「嘉永二年己酉十二月山中氏長女順ヲ娶ル。同三年改名守人。同四年九月十四日男子生ニル于片羽山中氏家一幼名彦介後改繁八。同六年二月伊勢参宮京阪ニ遊ブ岡村氏宅ニ十日斗滞留大和地方ニ廻リ京都御所ヲ拜シ三月下旬出立東海道ヲ経テ遠州浜松飯島氏ニ至ル暫時滞留夫ヨリ甲州ヲ経テ諏訪ニ歸ル于時四月初旬也。同六月アメリカ船浦賀ニ來ル天下沸騰。同七年二月七日永夫生ル」。嘉永五年二十六才の時『日本書紀』の註釈書を作成する願いを立て、翌六年伊勢参宮をしてその事業完成を祈願した武郷は京都に廻って御所を拝し、諏訪に帰って書紀通釈の仕事に着手、四十八年間努力して、亡くなる前年に完成するのであ

る。なお妻順子は安政四年に二十九歳で亡くなり、翌年その妹ぶん子(没九〇)をめぐったので、武郷は七男三女の子福者であった。すなわち武夫(嘉永四年生、明治三二年没、四九)、永夫(安政元年生、別家大正七年没、六五)、安国(松田家、没二八)、一子(長女、早世)、元彦(服部家、没七一)、慶子(慶応三年生、大和田建樹へ嫁す、没二七)、明代子(明治三年生、小沢侃二へ嫁す、没八〇)、治彦(明治六年生、特許局審査官、弁理士没八六)、弟治(明治十年生、没三九)、季治(明治十五年生、歌人国学者、没七七)らを数えた。

三、国学活動

万延元年三月三日、義士十七名が桜田門外に大老伊井直弼を刺殺する事件が起った。後にその十七年祭に武郷は左の歌を詠んで手向けた。

あづさゆみはる咲く花の 桜田のその名にあえて ますらをがたてしいさはは 花のごと千代にかをらむ 花の
ごと千代にさかえむ 十あまり七のきみらが 十あまり七のはる経て としどしに匂ふいろかの そはるおもへ
は

反歌

いまよりの後の栄を思ふにはまだ色うすき花ざくらかな(『蓬室集』)

また幕末から明治維新にかけての変遷については「思往事」と題する文章で次のように回想している。

ともし火をかゝげてつくづくと思ひ出づれば。かぎりなくかはれるよをも見しかな。その折々につけて心もはた千々にかはれるぞあやしき。天保のすゑ。弘化のはじめなど。徳川の代もいまださかりなるころほひにて。あり

なれたる政には何のこころもあらざりき。嘉永。安政のころより。こと國のこと世におこりけり。さるにつけては。やうやう世にももてわづらひ草とぞなれりける。はてはては上をなやまし國をそこなふにも至れりけり。そのかみ思ひけるやう。あはれいにしへは。みかどこそ天の下の事はしりたまひにけれ。中ごろより幕府といふものはじまりて。君をば。ないがしろにすめり。これは。まことの道にあらざ。いかで。むかしに立ちかへらせてしがなど。はじめてわれも人も思ひそめたりけり。文久。元治となりては。古き軍物語にこそは見つれ。ゆめにもまだ知らざりし戦といふこと。こなたかなたに起り。おとにのみ聞きつる矢さけびの声さへ耳にふれしぞ其よりはいとあやしかりし。それにつけてもみかどの御代を願ふはこの頃ぞさかりになりぬる。あるは異國の舟どもと戦ひ。あるは長門の國に討手の軍を起しなど。さまざまの事ありしなかり。さばかりかためたりし。二百余年の征夷府のおきても。くづれそめては竜田の川のにごれる名のみぞ流しける。かくても。いまだ祖宗のこころをおもひ。家頼のまことをつくしけるともがらも。天の下半にすぎにければ。たやすくはえうごかじものをと。たれもたれもうち思ひけり。慶応になりて。にはかに將軍の職を辞し。政のもとを朝廷に還しまゐらすとのふみをば捧げたる。上にもやがてその請を許したまひけるよ。天の下の人ども。誰かは始めて打ちおどろかざらむ。おもはぬに伏見の戦にはかにはじまり。きのふまで天下を打ちなびけし將軍も。朝敵といふ名おへるなどは。おなじ世にあるらむ事とも思はれず。げに夢の中なる夢なりしかな。かくても。彼のいかでと願ひわたりしみかどの御代に。いつしか立ちかへりぬるうれしさは。やらむかたこそなかりしか。国々。ところどころをしれりし君たちも皆みかどの御掟に従ひてその所領を奉り。その下とある武士どもの。勢。猛なりしも。あるはものつくる民となり。あるは物うる商人となりなど。目の前に立ちかはれる世こそ。げに思ひもあへざりけれ。よき事にはあしきことがこもれるわざとか。今となりては異國のあやしき心さへうちまじりて。賢きおほんうへをさへに

さしたる者もやうやうありとか。人は。おのがま山ま自にふるまふことわりあり。のり憲は君の心におこなふものにあらずなど。心にまかせたることを云ふらむよ。今より後はた如何なるさまにか変りゆかむとすらむ。いにしへのかしこき代々の帝の。定めおきたまひけむ国の掟も。遂には亡びはてました。かの憂かりし世さへ。今更にものにもがなやと打ちうめかるぞわりなき。五十路にいささかあまりぬる身にさへかかり。ましてさかしき老人もいまだ多くぞ世には残りためる。如何なるおもひをかなすらむ。いとむきかまほしくて。『蓬室集』

平田派の国学者としての歴史観がよくうかがえる文章で、動乱の世に生きた者の実感が流露している。

さて幕末尊王攘夷の論が起った時、王政復古の主動は岩倉具視公で、公から武郷に密旨があつて、憂憤を懐いて江戸に出たといわれる。

「飯田武郷翁年譜」(『日本書紀通釈』索引。以下、年譜と略称)によれば、

文久元年 諏訪に帰る。

二年 岩倉具視公、密かに勤王の志士を懐撫す。武郷之に与る。

三年 武郷、密かに勤王の士を糾合す。

元治元年 十一月二十日、武田耕雲斎、信州和田峠に戦ふ。

慶応二年 三月十五日、家督を長男武夫に譲り、討幕の機を熟するに備ふ。

とあつて、「密かに」の時期の正確は別としても当時の武郷の情況が偲ばれる。

その頃、高島藩主諏訪侯は幕府の老中であつたので、佐幕の藩士が武郷の動向や身辺を調べる者があつたが、武郷は之に屈せず、下諏訪に本営を置いて勤王の志士を糾合して機を熟するのを待っていた。武郷は江戸で友人権田直助、落合直亮らと謀り、数百人の同志を統率していた。偶小嶋四郎将満という者が変名して相楽総三と称し、勤王の

闘士であった。これを江戸の総監とし、直亮を副総監として諸国同志の連絡を図った。権田・落合・相楽の三者について記そう。

権田直助（一八〇一—一八七〇）は幕末から明治中期の医家、国学者。武蔵入間郡毛呂本郷の人。二十三歳の時、平田篤胤の門に入った。文久三年上京して王政復古を謀り、慶応三年の秋西郷隆盛と相談して江戸薩藩邸に入り、また上京して岩倉具視の意を承けて江戸と京都との間を往来した。維新後、大学中博士、相州阿夫利神社、伊豆三島神社、皇典講究所等を歴任し、明治二十年、七十九才で没した。

落合直亮（一八六一—一八九〇）幕末、明治時代の国学者。文政十一年武蔵南多摩郡駒木野村に生まる。直文の養父。国学を堀秀成に学び、文久三年幕府が浪士を募るに応じて上京し、清川八郎・藤本鉄石らと王事に奔走した。維新後官途に就き、伊奈県判事、陸前志波彦神社、塩釜神社、浅間神社等を歴任し、明治二十七年、六十七才で没した。

相楽総三（一八四〇—一八八六）討幕浪士隊の隊長で小島四郎ともいう。天保十一年生まれ。小島家は、元来、が下総北相馬の豪農の出身であるが、二十歳の時には兵学と国学とを門人に講ずるようになった。赤城山や筑波山の討幕拳兵に参加し、更に慶応二年から三年にかけて京都で討幕準備の運動に参加した。江戸に帰った小島は名を相楽総三と改め、総数五百名にのぼる浪士隊の隊長となった。しかし拳兵に失敗して、相楽は薩摩藩の軍艦で品川から兵庫へ逃れた。

明治元年、京都へ入った同志二十余名は西郷隆盛の命令ですぐ赤報隊に参加した。桑名へ進んだとき赤報隊に帰京命令が発せられたが、相楽のひきいる一隊は自ら東山道先鋒嚮導隊として信州へ進んだ。そのためついに東山道鎮撫総督岩倉具視から、軍令違反の罪で追討の命を受けることになり、相楽は捕えられて、三月三日冷雨の降る諏訪で死刑に処せられた。

その死を惜しんで武郷に次の作品がある。

悼小島四郎將満歌

花ならば咲かましものを 花ならば散らましものを 花ならぬ小じまのきみは 冬ごもり春のやよひの さくら
花さくをも待たで 時のまにうつろひにけり うつせみははかなきものか 国のため君のみためと たちちねの
親をもわかれ わかくさの妻をもおきて 梓弓ゆはずふりおこし いつる矢の末もとほらず 剣太刀たかみおし
ねりみがきつる心もとけず ますらをや悲しかりけむ 大丈夫のかなしくはあれど あまがけり後こそみらめ
国がけりいまこそしらめ 世の人のかたりつたへて あめつちに残るその名は 春花のさかゆるがごと 香に匂
ふごと 『蓬室集』

なお相楽については長谷川伸著『相楽総三とその同志』（昭和一八、新小説社）が詳しく、下諏訪中汐町に相楽塚（魁塚）が遺跡としてある。

また武郷については箕山坂本辰之助著『維新の烈士 國学の泰斗 飯田武郷翁伝』（昭和一九、明文社）が詳細で、特に武郷と岩倉具視との関係を説いている。

下諏訪で斬罪に服しさらし首にされた相楽の首級を奪って仮葬した武郷は、京都に上り、権田・落合などと岩倉邸に伺候して、相楽を斬った非を責めると、岩倉は相楽が軍律を乱したためそうせざるを得なかった事情を説明した。それで納得した三人は協力して、岩倉のため建白したり諮問に応じたりすることにした。その間の事情を高木俊輔氏はその著『幕末の志士草莽の明 治維新』（昭和五一、中公新書）で次のように説明される。『偽官軍』の同志の仕官には、しばしば岩倉具視の斡旋がはたらいていた。といっても、彼らは『偽官軍』事件後、同志嚴罰を指令した黒幕は岩倉だとみて、その暗殺計画をすすめた。しかし、彼らの怒りは、早くも岩倉の側近に感づかれ、先手を打たれて説得させられてしまうのだが、その見返りに岩倉が落着き場所を見つけては与えた、という意味があった。（中略）どれもが、平田

没後門人かその影響のつよい者たちであった。岩倉の説得を受けて暗殺を中止し、戊辰閏四月の官制が敷かれた後で、彼らは維新政府の下級職につくことになる。権田直助は、明治二年二月刑法官監察知事となり同八月皇漢医道御用掛に、落合直亮は、明治元年のうちに刑法官監察司判事となり伊那県判事として赴任し、科野東一郎も刑法官監察司に入り北海道開拓使の下級吏員となった。その他いくつかの出仕例はあるが、落合の赴任した伊那県をみると、その官吏には、かつての尊王攘夷論者や平田門国学者が、ひしめいていた。」（一六七～一六八ページ）

このように相楽総三ら赤報隊の偽官軍事件の処刑は平田派にとって大きな転換期をもたらし、その凋落を早める一方、慶応四年九月には京都皇学所が九条邸に設けられ、京都皇学所御用係に平田派から矢野玄道・玉松操・平田鉄胤らと共に武郷は採用されている。これが京都大学の創立（同年十二月）であって、彼は権田・落合の兩人と異なる学者としての道を歩み始めたのである。

なお芳賀登氏が『幕末国学の研究』（昭和五年三月、教育出版センター）で「出流山、岩船山事件のごときも、最近、長谷川伸の『相楽総三とその同志』や、栗原彦三郎の『出流山義軍』のような書によって、漸く始終の顛末が明らかにせられているが、これらの書には、詩歌をあげるものが殆んどない。このようなとりあつかいは歌のころを失って、国風の根源を確かめないものであって、とりあつかいに、根本的な誤りがある。長谷川伸は『将満遺草』をあまり参考にしてはいない。詩歌にあらわれた志士の悲願をとりあげない、ただ事件の形骸のみをさぐるもので、志士の精神をとりあげない態度といわなければなるまい。この事件において、義拳の先頭に立つ志士は、いずれもすぐれた詩歌の作がある。とくに、その参加者には、平田篤胤・鉄胤の門下が多く、平田派の国学を奉じる人々であった。」（四七三～四七四ページ）と志士における詩歌の重要性を説かれるが、武郷においてもこの指摘は正しい。前掲のように武郷に「悼小島四郎将満歌」があり、真情がこもっている。明治三十六年六月二十六日に飯田季治によって出版

された『蓬室集』には短歌・長歌・文詞が収録されているが、千五百余首の和歌、七十余篇の文章、それぞれに格調が正しく、国学者の気概がある。例えば「二荒紀行」（明治十八年）の一節に「陽明門。唐門。拜殿。本社。奥院。など。すべてこがねしろがねをちりばめたるさまは、かねてかばかりこそはあらめと。思ひし心にはさしもおどろかれず。よしやおどろくばかりなりとも。すへらぎの御ために。まめならぬ臣のあととどめたらむみや居は。さらになつかしからず。北条氏のあとにならひて。先帝を遠き嶋にしも遷し奉らむとかまへけるよ。いかなるよき事世に多かりとて。この臣の心の底ひは思ひ知らるるか。かかる事いふはあしと人の云ふらめども。この日記など。人に見すべきものにあらねばとて心やりに。」とあるなどは武郷の徳川氏に対する考えを示している。

四、明治期の業績

明治二年。高島藩に帰って皇学所教授となったが、明治五年、廢藩置県とともに皇学所も廢された。翌六年三月、氣比神宮の宮司に任じ、その後、貫前ぬきのさき・諏訪・浅間などの宮司になったが、九年宮司を辞して東京に移り、大教院教授となった。十一年太政官修史館御用掛、十三年東京大学教授となったが、十九年それを辞した。二十一年皇典講究師、二十三年国学院講師となり、二十四年慶応義塾教授、二十六年神宮教授、二十九年帝国大学文学科大學講師となった。しかし三十九年九月眼疾にかかり、帝国大學講師等をすべて辞した。その間、明治十六年に井上頼圀・久米幹文らと史学協会を設立、十九年にはその後身とも見られる大八洲学会に参加して「大八洲学会雑誌」を発刊して国学・歌壇のために貢献した。また嘉永五年、二十六歳の時に起稿して以来、動乱の時期にも研究を続けた『日本書紀通釈』七十巻を明治三十二年脱稿、四十八年間の苦心の結果を完成した。同年伊勢参宮、神宮皇学館から講義を

頼まれ伊勢に滞在して発病、三十三年（六〇〇）二月帰京して療養したが、八月二十六日、七十四才で没し青山墓地に葬られた。

なお嗣子の季治は家学を継いで『和歌秘伝鈔』『評釈業平全集』『詳訳徒然草』『日本書紀新講』『古語拾遺新講』『標註旧事紀校本』等の著書があるほか、和歌も詠んで大日本歌道会を主宰した。

大正七年に六十五才で没した次男飯田永夫には『日本上古史評論、原名英訳古事記』（英人チャンパーレン著、明治二一年四月刊行）の訳業があり、武郷のほか、田中頼庸・小中村清矩・栗田寛・木村正辞・黒川真頼が批評を寄せている。この年（六〇〇）の年齢は武郷六十二才、永夫三十五才、田中五十三才、小中村六十七才、栗田五十四才、木村六十二才、黒川六十才であった。

大和田建樹の『蓬室集』解説には次の文章があつて、武郷の日常が記録されている。「大人が世のきはみの御事業は日本書紀の通釈にありしは、人の知れるところ。いつまゐりても文机の上に日本書紀を見ぬ事なく。赤き青き白き筆して書き入れたる上に書き入れ。校合しては直し。直しては訂正しなど。よくもかくまでと驚かるる事多かりしが。身まからせ給ふ四五年前に。おのれ通釈を書きはじめたるは、武夫の生れたる又の年にて。嘉永元年なりしかば。今年にて四十五年になりぬ。思へば永のなじみなりと語り給へり。かいなでの御筆ずさびならぬは、是にても知らるるぞかし。」

なお、武郷の三女を妻とした小沢侃二の親戚寛克彦（法学博士）は所謂寛神道を説いたが、武郷から影響を受けた学者として挙げておく必要がある。

付記。飯田武郷の研究資料としては昭和女子大学近代文学研究室編著の『近代文学研究叢書』第四卷（昭和三二年九月）の「飯田武郷」（山崎節子氏執筆）が詳細であり、同書を参考にした点が多い。また飯田家の当主飯田幸郷氏（飯田国際特許法律事務

所・弁理士)が快く種々の資料を見せて下さった御好意に厚く謝意を表する。なお『日本書紀通釈』の特色を説いたものには野口武司氏の「飯田武郷」(国学院大学日本文化研究所報)昭和五五年一〇月、皇典研究所草創期の人びと——第十回——)がある。